

三浦一族

三浦氏は桓武平氏を出自とし、三浦半島を拠点に勢力を広げていきました。平為通が前九年の役の武功により、相模国三浦の地をもらい、「三浦」を名乗ったのははじまりとされています。その後、後三年の役や保元の乱などを経て勢力を拡大していきました。

治承4年(1180年)、源頼朝が打倒平家の兵を挙げると、頼朝とともに戦い、鎌倉幕府の設立に尽力しました。

衣笠合戦で討死に遂げた伝説の棟梁三浦義明、頼朝の旗揚げ当初から味方し支えた三浦義澄、北条義時と鎌倉幕府の武士政権確立のために奔走した三浦義村、初代侍別当となった和田義盛、源義経とともに戦った佐原義連。これらの功により、三浦一族は幕府の中で重用されていきました。

そして、三浦半島だけでなく、北は青森から南は鹿児島まで、守護や地頭となって各地を領し、全国展開していきました。

宝治合戦(1247年)で執権北条氏と戦い、本家が滅びますが、一族の佐原氏が生き残り、「三浦」姓を復姓し本家を継ぎました。

戦国時代には、岡崎城(平塚市・伊勢原市)、新井城(三浦市)、住吉城(逗子市)などを拠点として、相模国の有力国衆となりました。そして、永正13年(1516年)、北条早雲(伊勢宗瑞)に新井城を落とされるまでの約400年、相模の雄として、関東の中世史に色濃く足跡を刻みました。

さらに、和田氏、佐原氏ら各地に広がった一族たちも、それぞれが有力国衆や戦国大名となりました。

三浦一族は各地で時代を通して生き残り、その歴史を今に伝えてくれるのです。



三浦一族の家紋「三つ引向」

もしかしたら、全国の「三浦さん」は三浦半島の三浦氏に繋がるかもしれません♪



三浦一族は奥州合戦、承久の乱などの功で全国に展開していきました。伊達政宗と戦いを繰り広げた会津の戦国大名蘆名氏、美作国で栄えた美作三浦氏は尼子氏や毛利氏、宇喜多氏らと熾烈な抗争を繰り広げました。越後国では和田氏が、戦国時代に上杉氏に対抗できるほどの勢力まで成長し、越後の戦国時代を彩りました。このように三浦一族は各地で活躍したのです。他にもたくさんの三浦一族が全国各地で活躍しました。

家紋義村と胤義～承久の乱、兄弟の選択～

承久3年(1221年)5月、後鳥羽上皇によって執権北条義時追討の院宣が下されると、幕府の筆頭御家人である三浦義村の弟胤義は朝廷方の大将のひとりになぜられました。和田合戦まで協力し合っていた義村、胤義兄弟はここに袂を分かったのです。

胤義が朝廷方についた理由のひとつとして、胤義の正室が2代將軍頼家の側室だったことが挙げられます。胤義は彼女が連れてきた頼家との遺児の後見となりましたが、その子は義時によって殺されました。これらのことから、胤義は幕府に対してかなりの恨みと不信感を持っていたと思われる。胤義は最期に義村と話すことを希望しましたが、義村は取り合わなかったといわれています。そして、胤義は木島神社(京都・太秦)で自害しました。

頼朝挙兵と小坪合戦

源頼朝は治承4年(1180年)8月17日に挙兵し、伊豆国目代の山木兼隆を討ち取るものの、8月23日の石橋山合戦で負けてしまい、海路で房総半島へ逃げ落ちました。

その頃、三浦一族は頼朝と合流するため、石橋山に向かっていたのですが、酒匂川の増水で渡河できずに頼朝の敗走を知ることになったのです。そのため、三浦一族は本拠地衣笠城に引き返しますが、戻り途中の由比ヶ浜、小坪付近で平家方の畠山重忠軍と遭遇してしまいました。

合戦になりかけるも、和睦が成立。しかし、和睦が結ばれたことを知らない和田義茂(和田義盛の弟)が杉本寺のあたりから救援に駆けつけ、畠山軍を攻撃してしまいました。それにより、小坪合戦が勃発。三浦方は勝利するも、一族の多々良重春らが討ち取られました。

この戦いのときに三浦義澄は笠摺(葉山町)で戦況を見て、指示をしたとも伝わります。小坪合戦は現在の由比、材木座、小坪で起きたとされていて、鎌倉から逗子に入る山越え地点で激戦が繰り広げられたと伝わっています。

小坪合戦では勝利した三浦一族でしたが、その2日後に畠山重忠率いる平家方の軍勢が衣笠に攻め込み、衣笠合戦が起きました。三浦一族は籠城するも持ちこたえることができず、棟梁の三浦義明を犠牲にし、一族は夜闇に乗じて衣笠城を脱出し、船で房総半島へと渡り、頼朝と合流を果たしました。

相模国内で大きな勢力をもつ三浦氏の軍勢と無事に会えた頼朝は、房総半島で態勢を整え、平家方の勢力を駆逐し、2ヵ月も経たないうちに鎌倉入りを果たします。そして、頼朝が三浦一族を重用したことにより、幕府の中で、中心的な存在となっていきました。まさに、小坪合戦は三浦一族にとって契機になる重要な戦いだったのです。



光明寺裏手の鎌倉市立第一中学校付近の坂道。当時は海岸沿いの道がなかったため、山越えをして逗子に入ったと思われます。小坪合戦が繰り広げられた小坪坂はこのあたりかもしれません。

小坪合戦の痕跡スポット【来迎寺】

建久5年(1194年)に頼朝が三浦義明の菩提寺として建立したと伝わり、境内には三浦義明と小坪合戦で戦死した多々良重春の墓と伝わる五輪塔があります。逗子と鎌倉の境の要衝ゆえ、小坪周辺では中世を通じてたびたび戦いが行われたと推察され、それらの戦死者の弔いのためのものと思われる石塔が数多く残っています。

住吉城の戦い【三浦道寸&三浦道香 vs 北条早雲】

住吉城は戦国時代に築かれた三浦氏の城で、ここはかつて鎌倉幕府の港湾施設「和賀江嶋」が築かれた地であることから、海上交通の要衝地であることがわかります。住吉城は三浦氏の重要な水運拠点だったので。昭和の埋め立て以前は、眼下まで海が迫っていました。

関東動乱期に北条早雲(伊勢宗瑞)が相模国へ侵攻を開始。永正9年(1512年)8月、三浦道寸の岡崎城を攻撃します。岡崎城は落城し、道寸は撤退を余儀なくされ、住吉城まで退きました。それを追う形で東進してきた早雲は玉縄城(鎌倉市)を改修整備し、住吉城に対する拠点としました。そのため、道寸は住吉城の守備を弟の道香に任せ、自身は本拠の新井城(三崎城)まで退くことになるのです。

その後、住吉城には早雲の嫡子、氏綱が中心となって攻撃を仕掛けたとされ、持ちこたえられなくなった道香とその家臣は城を出て延命寺(逗子市)にて自害したと伝わります。

住吉城は三浦一族滅亡の歴史を物語る合戦の舞台となった貴重な城なのです。

住吉城の戦い痕跡スポット①【海前寺】

海前寺も住吉城の城域内と思われる、境内には住吉城の戦いの戦死者の弔いと思われる石塔が多数残っています。墓地改修工事の際、頭蓋骨や刀などが出土したといえます。

住吉城の戦い痕跡スポット②【延命寺】

延命寺境内には住吉城から脱出し、延命寺で自害したと伝わる三浦道香と家臣の供養塔が残っています。



延命寺「三浦道香主従七武士之墓」



住吉城の城内にあたる正覚寺の裏山には、住吉神社が鎮座しています。海が一望でき、三浦一族の水軍拠点であったことがよくわかります。



逗子市観光協会発行

©山城ガールむつみ

住吉城の「御城印」販売中。三浦一族最後の当主「三浦道寸」をモチーフにし、三浦氏の家紋をデザインしています。